

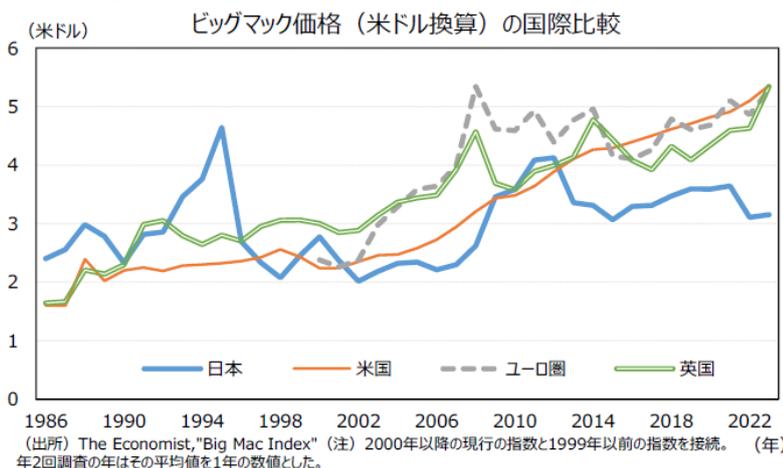
## ビッグマック指数

最近面白いレポートを見つけましたので紹介します。

物価や労働生産性を国際比較する場合に、購買力平価為替レート(PPPレート)というものを使います。皆さんもご覧になったことがあるのではないのでしょうか。これは、自国と外国で物価水準が等しくなるように為替レートが決定されるという理論を購買力平価仮説といい、その時の名目上の為替レートを言います。

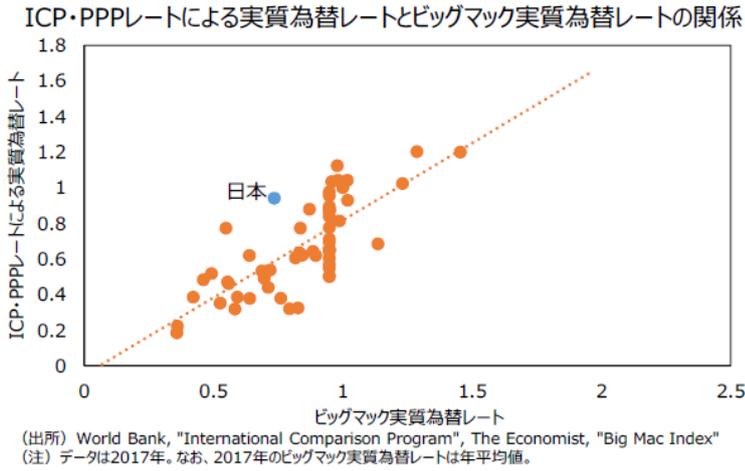
当HPのSKIPの視点で取り上げています、労働生産性の国際比較でもPPPが使われています。OECDでは、約3000品目の財やサービスの価格を調査して算出したPPPを用いています。

一方で、より直感的に各国の物価水準を比較する上で、時々お目にかかるのがビッグマック指数です。ビッグマックは、多くの国で同じ品質のものを同じサービスで提供していることから、世界の物価を見るうえで分かりやすいようです。最近英国のエコノミスト誌による調査が行われ公表されています。



2013年1月時点で、日本のビッグマック販売価格は410円(その後450円に値上げ)で、ドル換算すると3.15ドル。米国では5.36ドルで販売され、ユーロ圏では4.86ユーロ(5.28ドル)で販売されていました。世界中のビッグマックは同じ価格が同じ価格であるべきとの立場で比較すれば、日本のビッグマックは410円=5.36ドルで

あるべきとの仮説が成り立ちます。すなわち、ビッグマックを基準に為替レートを決めれば、1ドル=76.49円となります。調査時点での市場為替レートは130.10円であり、ビッグマック価格による購買力平価仮説は成立していません。ビッグマックが同じ品質同じサービスということを前提とすれば、日本の販売価格は、米国のお販売価格に比べて40%安いということになります。ちなみに調査された55各国中日本の販売価格は42番目(高い順に)でした。これを以前の状況と比較します。2000年4月を見てみると、日本での販売価格は294円(2.77ドル:当時の為替レート106円)、米国では2.24ドルと日本の方が24%高かったのです。2000年以降日本でのビッグマック販売価格は値上がりしていますが、相対的に見ればより安価になっているのです(他国のビッグマックがより値上がりしている)。この時点では日本の販売価格は上から5番目に高かった。



詳しい話は省略しますが、ビッグマックで測定した販売価格からの実質為替レートの傾向と、PPPによる、その他の物価の実質為替レートの傾向は良い相関関係を示しているようです。

(参考)

ニッセイ基礎研レポート 2023-4-13